

大名倉遺跡ほか14遺跡(範囲確認)

所在地 北設楽郡設楽町

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成27年5月～12月

調査面積 1,500㎡

担当者 酒井俊彦・川添和暁・鈴木恵介

各遺跡の位置は平成27年度調査遺跡位置図を参照

大名倉遺跡(大名倉字大名倉北緯35度06分35秒 東経137度32分43秒)・日掛遺跡(字日掛北緯35度06分29秒 東経137度32分52秒)・西地・東地遺跡(字西地・東地北緯35度06分36秒 東経137度32分44秒)・ハラビ平遺跡(字ハラビ平北緯35度06分25秒 東経137度33分1秒)・大名倉丸山遺跡(字丸山北緯35度06分02秒 東経137度33分11秒)・上戸神遺跡(大字川向字上戸神北緯35度06分50秒 東経137度33分25秒)・大栗遺跡(字大栗北緯35度06分40秒 東経137度33分52秒)・万瀬遺跡(字万瀬北緯35度06分41秒 東経137度33分53秒)・大畑遺跡(字大畑北緯35度06分34秒 東経137度33分58秒)・向橋遺跡(大字八つ橋字向橋北緯35度07分49秒 東経137度35分39秒)・永江沢遺跡(字永江沢北緯35度07分33秒 東経137度35分12秒)・添沢遺跡(大字田口字添沢北緯35度06分22秒 東経137度34分23秒)・笹平遺跡(大字小松字笹平北緯35度06分46秒 東経137度34分03秒)・川向東貝津遺跡(大字川向字東貝津北緯35度06分26秒 東経137度33分52秒)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として国土交通省から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施した。今年度は14遺跡で遺跡範囲確認調査を実施した。調査は、各遺跡の調査対象部分に平面1m×2mを基本とする試掘坑(テスト・トレンチ)を遺構基盤面または地山面まで掘りさげ、遺構・遺物の有無と堆積層序を確認する方法をとった。トレンチ数は3ヶ所(笹平遺跡)～182ヶ所(大畑遺跡)、調査面積は6㎡(笹平遺跡)～446㎡(大畑遺跡)、総計はトレンチ数539ヶ所、調査面積1500㎡である。

立地と環境 遺跡は豊川上流域、三河山地の北設楽郡設楽町内に所在する。調査地区として豊川支流の境川流域に笹平遺跡、大畑遺跡、大栗遺跡、万瀬遺跡、川向東貝津遺跡、添沢遺跡、向橋遺跡、永江沢遺跡、上戸神遺跡、同じく寒狭川流域に大名倉遺跡、西地・東地遺跡、日掛遺跡、ハラビ平遺跡、大名倉丸山遺跡がある。遺跡は標高360～460mの範囲に位置する。遺跡の位置する地形については、大名倉遺跡・笹平遺跡・川向東貝津遺跡は豊川支流の河岸段丘上、他は山地斜面または山地平坦部(大畑遺跡)に立地する。(酒井俊彦)

調査概要1 ここでは、5月から10月までに実施した調査について報告する。調査の内訳は、大名倉遺跡38カ所(88㎡)、日掛遺跡27カ所(54㎡)、西地・東地遺跡5カ所(10㎡)、大栗遺跡19カ所(170㎡)、万瀬遺跡4カ所(16㎡)、大畑遺跡182カ所(446㎡)である。また、本調査に伴い、遺跡の範囲が広がる可能性が生じたため、9月に笹平遺跡3カ所(6㎡)を行った。

大名倉遺跡 大名倉遺跡は、大名倉地区の寒狭川右岸(西岸)に位置する。本遺跡は、下谷遺跡の名称でも知られており、これまでも多量の遺物が表面採集されている(名倉村1951『三州名倉』、鈴木富美夫ほか1968『北設楽郡史 原始-中世』北設楽郡史編纂委員会)。1968年3月には早稲田大学による発掘調査が行われており、近年報告書も刊行された(平野吾郎編2004『下谷遺跡』北設楽縄文文化研究会)。現在は、町指定史跡となっている。

設楽ダム関連工事に伴い、2007・2008・2013・2014年に愛知県埋蔵文化財センターにより範囲確認調査が行われている。これらに続き、今年度は、南北に細長い遺跡西端の山際が確認対象地域となった。

確認対象地域南端では、谷地形内の土石流堆積あるいは近代以降の耕作土が認められるのみであり、この状況は町道を挟んで東側（低位方向）でも同様である（TT01～04・06・07・29～36）。今年度の確認範囲外の南側には、現況でも谷地形を確認できるが、その北側への広がりには当たるのであろう。TT05では表土直下で岩盤を確認した。東側からの丘陵末端に位置しており、この谷地形の範囲が推測される。

調査区北西端は現況でも流水が著しい地点であり、ここでも谷地形内の土石流堆積が確認できている（TT13・14）。これら二つの谷地形は、遺跡の範囲を画するものと推測される。

町道の西側（高位方向）では、耕作土の下にシルト質の地山を確認した。遺物の出土は耕作土中であるが、TT12では戦国期の土師器鍋が出土した。

今回の確認対象の北東側（町道より東側の区域）では、縄文時代を中心とする遺構・遺物を確認した。特に、TT16で確認できた法量の大きな土坑は竪穴建物跡の可能性もあり、良好な遺跡の保存が推定される。周囲からは縄文時代早期・中期の土器片が出土していることから、当該時期の活動痕跡が残されている可能性がある。

日掛遺跡

日掛遺跡は寒狭川の西岸、大名倉遺跡の南東側に位置する。現況は、北西側から南東側に向かって傾斜をしており、これが寒狭川に張り出す3段の平坦面となっている。遺跡範囲とされている東西両端には現況でも寒狭川に向かって流れる沢がある。遺跡範囲内の東側にある高まりは、現在は東海自然歩道となっている路の開削によって独立状になったもので、本来は南西から伸びる尾根末端に当たるものである。

遺跡全体にわたり、旧河床の堆積および土石流堆積が認められた。最も良好な平場と想定された中央南側の平場も、盛土中から近代の陶器片が出土するなど形成時期は極めて新しく、急峻な旧地形を埋めて平場が造成されていたことが明らかとなった（TT24・25）。TT09では、土石流堆積層の上で近世末の古銭（文久通宝）が出土したことから、TT09・11付近の平場は近世末以降には存在していたようである。安定した層が確認できたのは、TT20・26・27のみである。このラインは南から北に伸びる稜線に当たるものであるが、ここでも明確な遺構・遺物を確認できない結果となった。

西地・東地遺跡

西地・東地遺跡は、大名倉地区の寒狭川左岸（東岸）に位置する。本遺跡は、遺跡北西側（本来の西地遺跡側）を対象として、2014年度に本調査が行われた。14B区・14C区とした町道を挟んだ両調査区では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が良好に確認され、特に14B区では、石囲炉跡や土器敷炉跡をもつ竪穴建物跡・埋甕・袋状土坑など、縄文中期後半から後期初頭にかけての集落跡が見つかった。今年度の範囲確認対象地域は、遺跡範囲の南東端、寒狭川左岸（北岸）の段丘上である。当地は白鳥神社の跡地で、和鏡「水辺蘆双雀鏡」が出土した場所付近である。対象地域にTT01からTT05の5本のトレンチを設定した。

TT01・02では、表層の耕作土や盛土下には河川堆積層が存在し、さらに下層には安定した堆積層を確認できたものの、この面からは明確な遺構は確認できなかった。TT01では近世の遺物が出土しているが、上層の耕作土からのみである。TT03では北側から

伸びる稜線末端の安定した堆積層が確認できたものの、遺構・遺物は確認できなかった。TT04 は旧河床景観で、TT05 はごく最近の盛土が厚く堆積している場所であった。

大栗遺跡

大栗遺跡は川向地区の遺跡で、境川に流れ込む戸神川の左岸（東岸）、挿鉢状の谷地形内に形成された緩斜面に立地する。大畑遺跡が位置する丘陵の下部、戸神川が東から南方向に屈曲する部分に位置しており、緩斜面の現況も平面形状が弧状を呈している。

本遺跡は、平成 26 年度に範囲調査が行われたものの、機材など調査体制の事情により、一部様相が把握しきれなかった。本年度は、より詳細な確認が必要となった遺跡中央部と、より深部まで確認が必要となった遺跡西部の調査を行うこととなった。なお、平成 27 年度現在、大栗遺跡の一部では本調査も行われている。

遺跡範囲の中央部で調査した、TT01～14 では、挿鉢状の傾斜を呈する TT01・TT02 で、遺構・遺物の確認はできなかったものの、緩傾斜となる地形の底部分では、遺構・遺物の存在が想定される。特に、TT13・14 では、地山様の堆積層が遺物包含層となっている可能性がある。7 月現在行われている 2015 年度の本調査、A 区としている調査区南側では北東から南西方向への土石流堆積の墨重が確認されており、今回確認された石器を含む包含層は、この堆積層に由来するものの可能性もある。その形成時期が問題となろう。

一方、TT15～18 が調査された遺跡西端の谷地形部分では、明瞭な遺構・遺物が確認できなかった。TT15～17 では、現況とは異なる棚田様の水田が確認されたものの、時期は近代以降である。TT18 では、この棚田様の水田自体も確認できないほど、形成された堆積層自体は極めて新しい。TT18 付近の前年度の調査トレンチ（平成 26 年度 TT10）では、上層で弥生土器が出土したものの、二次堆積の可能性が極めて高い。

万瀬遺跡

万瀬遺跡は、大畑遺跡が立地する丘陵に沿って、境川が西側から南側さらにまた西側へと、流れが蛇行する場所にあたる。遺跡は、川向地区の境川右岸（西岸）の大きな谷地形内の緩斜面に位置しており、境川との比高差は、現況で 25m 以上である。本遺跡は平成 26 年度に本調査が行われた。本年度の万瀬遺跡範囲確認対象地域は、遺跡範囲とされる西端、県道小松・田口線の西側に作られた斜面中腹の平場である。

TT01 では土石流堆積層が厚く堆積している状況であった。TT02・03 では、耕作土や土石流堆積下からやや安定した黄褐色粘土質シルトが認められた。しかし、近代以降の遺物しか出土せず、検出された遺構様のもも近代以降のものと考えられる。TT04 も耕作土の下に比較的安定した堆積層見つかったものの、この上面では近代以降の遺物のみで、遺構状のももこの時期以降のものと考えられる。

大畑遺跡

大畑遺跡は、川向地区の境川右岸（北岸）に位置する。当地は、崩落地形によって形成された南側に突き出した段丘上に立地しており、東および南側には境川が、西側には戸神川が流れそのまま境川へと合流する。この崩落地形の東側奥には万瀬遺跡が、西側には大栗遺跡が位置し、南側下段の緩傾斜面には川向東貝津遺跡が位置する。この段丘は、周囲との比高差が著しく高くなっており、東側では境川との比高差は約 46m、南側では川向東貝津遺跡が立地する緩傾斜面との比高差は約 70m である。

今回の範囲確認調査成果を、地区別に分けて総括する。

旧ゲート ボール場北 側

TT001～010・012～018・021 が当たる。当地の北端は、岩盤上に風成堆積層が確認されるのみで、遺構・遺物は認められなかった。南側の丘陵上位に向かっていくに従い、徐々に黄褐色粘土質シルトの堆積を確認することができた。しかし、そこでも遺構・

遺物は確認できないでいる。

- 旧ゲート** TT022・023・028 ～ 030・034 ～ 037・040 ～ 044・048・049・053・054・
ボール場内 059・060・063・065・112・113が当たる。当区域は、全面に渡って多量の盛り土により平坦面が形成されている。その中でも TT034・TT035・TT040あたりは浅く、時期不詳の落ち込み（遺構か）を確認している。地山直上で確認される堆積層は、平坦面造成時に攪乱を受けているものが多いようである。旧地形は北東方向に向かって大きな谷地形が存在していたものと考えられ、最も深い部分を埋めたと考えられる TT112・TT113 では現地表下 5m 以上を掘削しても地山まで達しなかった。
- 西側丘陵部** TT011・019・020・024・025 ～ 027・031 ～ 033・038・039・045 ～ 047・050 ～ 052・066 ～ 068・074 ～ 076・083 ～ 085・091 ～ 093・106 ～ 111・126・129・130 ～ 135 が当たる。当地域は、TT066 および TT067 を丘陵頂点とする高まりである。北側傾斜面で TT025 や TT038 で不明落ち込みを確認したものの、遺物の出土は確認されていない。遺構・遺物が濃厚に確認されたのは南側緩傾斜面であり、TT066・TT093・TT106・TT107 ～ TT109・TT130・TT131・TT134 で遺構が、TT075・TT093・TT108・TT107・TT110・TT111 で遺物の出土を確認した。特に TT075 では地山直上の、にぶい黄橙色粘土質シルトから出土遺物を確認することができ、これが本来の遺物包含層と考えられる。その層自体は、南側緩斜面に広く認められた。
- 谷部分** TT055 ～ 058・064・069 ～ 071・077・078・086・087・094 ～ 096・101・102・104・114 ～ 125・127・128 が当たる。当区域は、両丘陵の谷底部分にあたり、黒ボク土といわれる黒色土の堆積が著しい。黒色土中からは、石器の出土が多く認められ、出土した土器では TT070 で縄文晩期、TT116 で縄文中期？、TT123・124 で条痕文（弥生前期？）が認められる。東西両脇の丘陵部からの遺物流入も著しいようであるが、谷部分でも TT094・TT101・TT100 より北側の範囲では、地山とする明黄褐色粘土質シルト上でピット・土坑を検出することができた。TT094・TT101・TT100 より南側に向かって、極めて緩やかな傾斜地形を呈するようになる。TT102 では、掘削中に激しい湧水を確認した。湧水を利用した施設など、当時の活動痕跡が残されている可能性がある。
- 南側傾斜面** TT136～164が当たる。地表で確認できる湧水地点を含む範囲である。黒色土直下には、地山のより低位層（粘土質シルトがなく、礫の比率が高い部分）が認められる。この範囲では、金属を対象とした砥石の出土が多く、磨石・敲石類としたものも、金属を対象としたものの可能性がある。また、TT159からは土坑と近世陶器が見つかったことから、近世期の活動痕跡が残されている可能性がある。TT144 では旧道脇に設けられた側溝とおぼしき遺構も見つかっており、これら近世の活動痕跡は旧道との有機的関連性も考えられるかもしれない。
- 東側丘陵部** TT061・062・072・073・079 ～ 081・088 ～ 090・097 ～ 100・103・105・165・169 ～ 182 が当たる。東側丘陵部は、TT088・089 の北西側で遺構と思われる落ち込みが確認され、TT165 で剥片の出土が確認された程度である。丘陵頂上あるいは南東側裾部では遺構・遺物は確認されていない。しかし、TT165 の北東側の緩斜面の区域で時期不明の土器片を採集することができた。このことから、特に南西側緩斜面側は、遺構・遺物がのこされている可能性が考えられよう。
- 笹平遺跡** 遺跡は、境川左岸の河岸段丘上に位置している。同年度に 6,930 m²を対象として本調

査が行われたが、15Ba 区北端で弥生時代前期の土器棺墓 1 基が検出されたことから、調査区外北側の傾斜地形部を中心に調査を行った。

TT01 から TT03 のいずれからも丘陵上からの土石流堆積が確認されたのみで、遺構・遺物を確認することはできなかった。(川添和暁)

調査成果 2 ここでは主に 10 月から 12 月までに実施した調査成果について報告する。調査の内訳は、大名倉丸山遺跡 39 カ所 (84 m²)、ハラビ平遺跡 17 カ所 (64 m²)、上戸神遺跡 5 カ所 (18 m²)、永江沢遺跡 30 カ所 (72 m²)、向橋遺跡 37 カ所 (141 m²)、添沢遺跡 88 カ所 (256 m²) である。本調査時に下層から石器の出土をみて急遽実施された川向東貝津遺跡では 11 カ所 (75 m²) を 9 月に実施した。

大名倉丸山遺跡 平成 27 年度調査対象範囲は、北向き斜面の中位から下位に造成された平坦面に位置する。調査地は南東に向かって緩やかに標高が上がり、調査地東端部は南北方向に痩せた尾根状の地形が残る。さらに東側は切り立った崖となっている。

結果として遺構や遺物の検出は無かった。本調査が行われた平坦面は現況の耕作土と、すぐ下にも耕作土のような層が認められることから、新しい年代に複数回にわたって造成を受けている。造成以前から残存した層の分布も一部にとどまり、旧表土の可能性のある黒色土は調査地北辺沿いの TT13、TT14 等に分布する。反対に南辺部分の TT25 や TT30 では表土直下に地山が検出されたことから、元来は北西向きの緩斜面であった調査地を大きく削平し、北側に土砂を盛って平坦面を広く確保している様子が見える。範囲のほとんどで旧地表面は現況よりも高い標高に位置したものの、すでに滅失しているものと思われる。

ハラビ平遺跡 平成 27 年度調査対象範囲は南西向き斜面に位置している。現地形は宅地が 3 段に造成されており、調査においても全体で厚く堆積した造成土を確認した。

調査の結果、造成以前の旧地形は、調査地中央部に位置する北東—南西方向と、それよりもやや小規模な南東部の東—西方向の二本の谷が想定される。南東部の東—西方向の谷は、TT15 の下位に黒色土の層位が確認できたが、TT07 で縄文土器を検出した層はこれとは別の砂礫層であり、上位斜面より流れた土石流の中に混在していた可能性も考えられる。明確な遺構は見られなかった。

上戸神遺跡 調査対象地区は現況の国道より南、概ね全域が南西向きの斜面に位置している。TT09 は過去の範囲確認調査で土坑が検出されているため、連続部分も含めて本調査としての実施であったが遺構とは確認できなかった。遺構の基盤層と考えられている褐色砂層も掘り下げを行ったが、下位は径 1m におよぶ円礫が多数検出される砂礫層となり遺構や遺物は確認できなかった。

永江沢遺跡 範囲確認調査対象範囲は、北側の境川に向かって突出する尾根の裾部分に馬蹄形に設定された。トレンチは、調査範囲の両南端部分に設定した。調査範囲の東は北流する天堤川の左岸河岸段丘、西は天堤川と合流後の境川の左岸河岸段丘となっている。尾根上には設楽町指定天然記念物「八橋のウバヒガン桜」がある。

調査の結果、尾根の東側裾部分、TT07、TT08 では、表面に近い整地土層から 16 世紀代の天目茶碗の破片が検出された。この遺物を上限としてこれより新しい近代の陶磁器破片が同じトレンチより多く出土している。これらの遺物は尾根上から転落してきたと考えられ、近代以降に尾根上が小学校として整備される以前に居住などの土地利用が

あったと考えられる。

尾根西側では、小規模な河岸段丘上に耕作地を造成している。TT31 ではややしまりのある褐色シルトの層が地表下 1m 程度で観察された。落ち込みのように見えるものも検出されたが、内部に根を多く含んでおり、近現代の水田面造成以前に繁茂した植物の痕跡と推定した。

向橋遺跡

範囲確認調査対象範囲は、南北に流れる境川の東岸、河川敷と山裾の境界部分に位置している。斜面裾部分という立地から想定される通り、掘削を行ったトレンチの多くで、斜面上位からの土石流による砂礫が厚く堆積し、岩盤や確実な地山に到達することが困難な状況であった。調査対象地北東端の TT38 ではシルト層からなる水成堆積層が検出されたことから、河川敷に近い箇所においては高水位となる時期があったものと考えられる。遺構・遺物は確認できなかった。

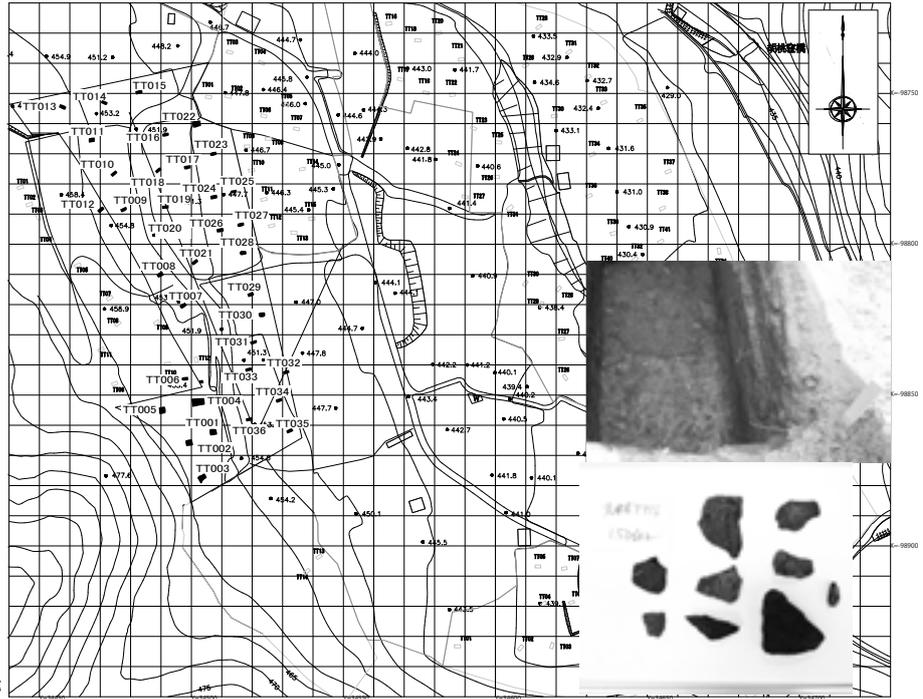
添沢遺跡

範囲確認調査対象範囲は、国道 257 号線の南西側、旧添沢鉱泉の谷より西側に流下する沢が境川に合流する地点に位置する。この沢を挟んで尾根状の地形が西向きにわずかに突出する地形となり、現況はこの尾根状の地形全体に棚田が造成されている。北側の尾根では、TT01~TT29 までの調査、南側の尾根では TT30 以降の調査を行った。その結果明確な遺構は検出されていないものの、国道よりも下位の斜面全域に安定した褐色シルト層の基盤層が検出され、基盤層上層に位置する黒褐色シルト層からは山茶碗の破片が検出された。一方の南側の尾根先端部は、前述の遺構が検出可能な安定した層は少なく、斜面の下位は河川堆積により、上位は土石流によると考えられる砂礫層で形成されている。河川敷と上位の段丘面の境界にあたる崖の下位では黒色土が検出され、須恵器（壺）口縁部が出土した。同様の層は接近した標高付近に帯状にわずかに分布するものの、広範囲では確認できていない。

川向東貝津遺跡

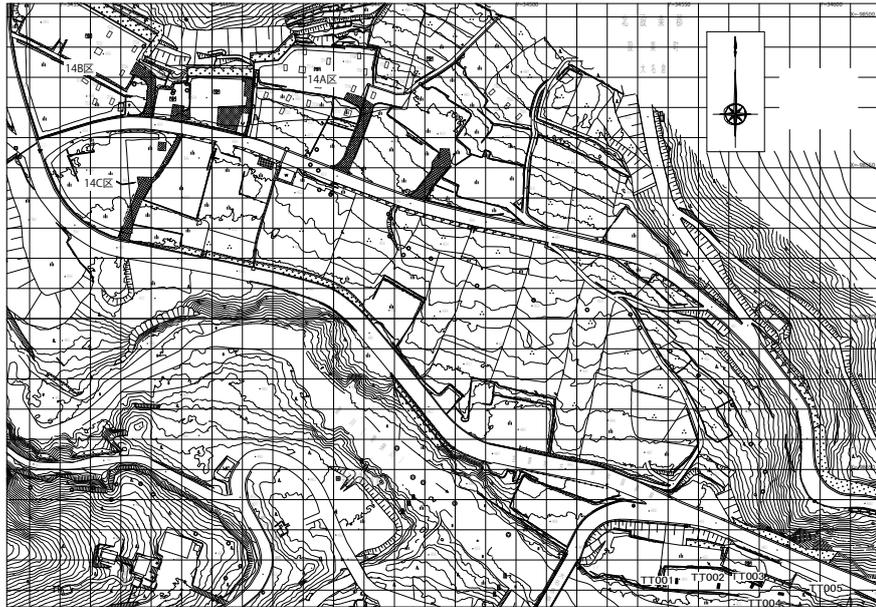
川向東貝津遺跡 15A 区の遺構検出面より下層から石器が複数検出されたことから、急遽範囲確認調査を実施した。15A 区の遺構にとっては基盤層となる黄褐色シルト層より、安山岩系・白色風化石材の石器が検出された。トレンチは最大で遺構検出面より 1m の深さまで掘削を行い遺物の有無を確認した。石器・石材分布は、最上層の黄褐色シルト層にもっとも多いが、下位の河川堆積礫層の直上からも出土しており、下位にいたっても一定数の石器・石材の出土が認められる。石器・石材の分布範囲は、本調査 15A 区西端部に集中する。掘削を行ったトレンチでは、表面と上位には黒曜石を含む石器・石材が検出され、下位では安山岩系と白色風化石材の石器・石材を検出した。これについて、愛知学院大学の白石浩之教授から複数の文化層が存在する可能性を指摘された。

(鈴木恵介)

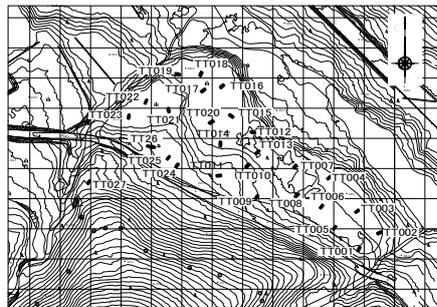


大名倉遺跡

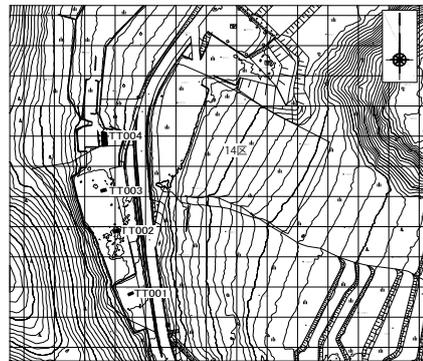
TT16検出遺構(上)と出土遺物(下)



西地・東地遺跡

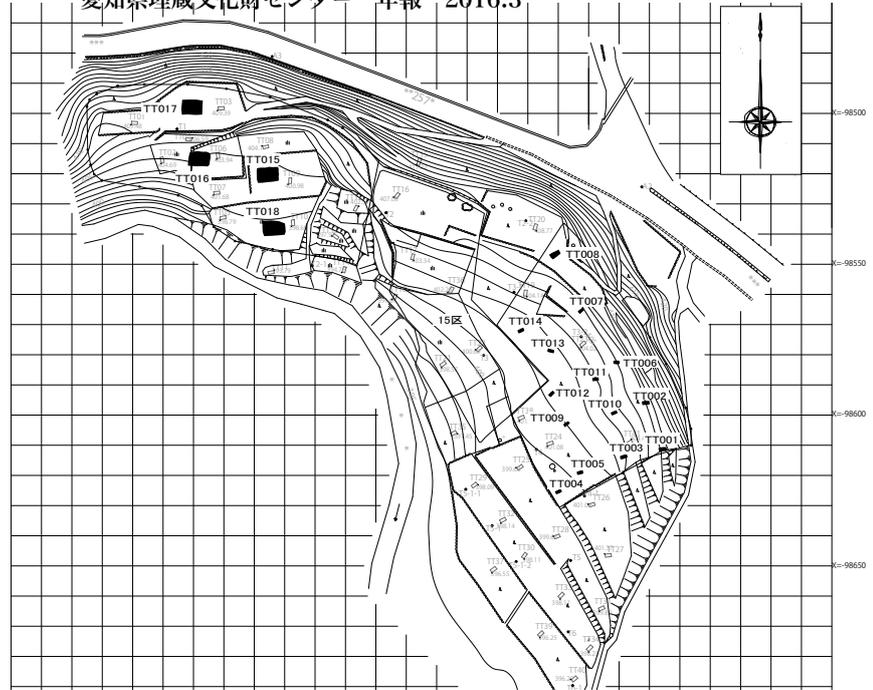


日掛遺跡

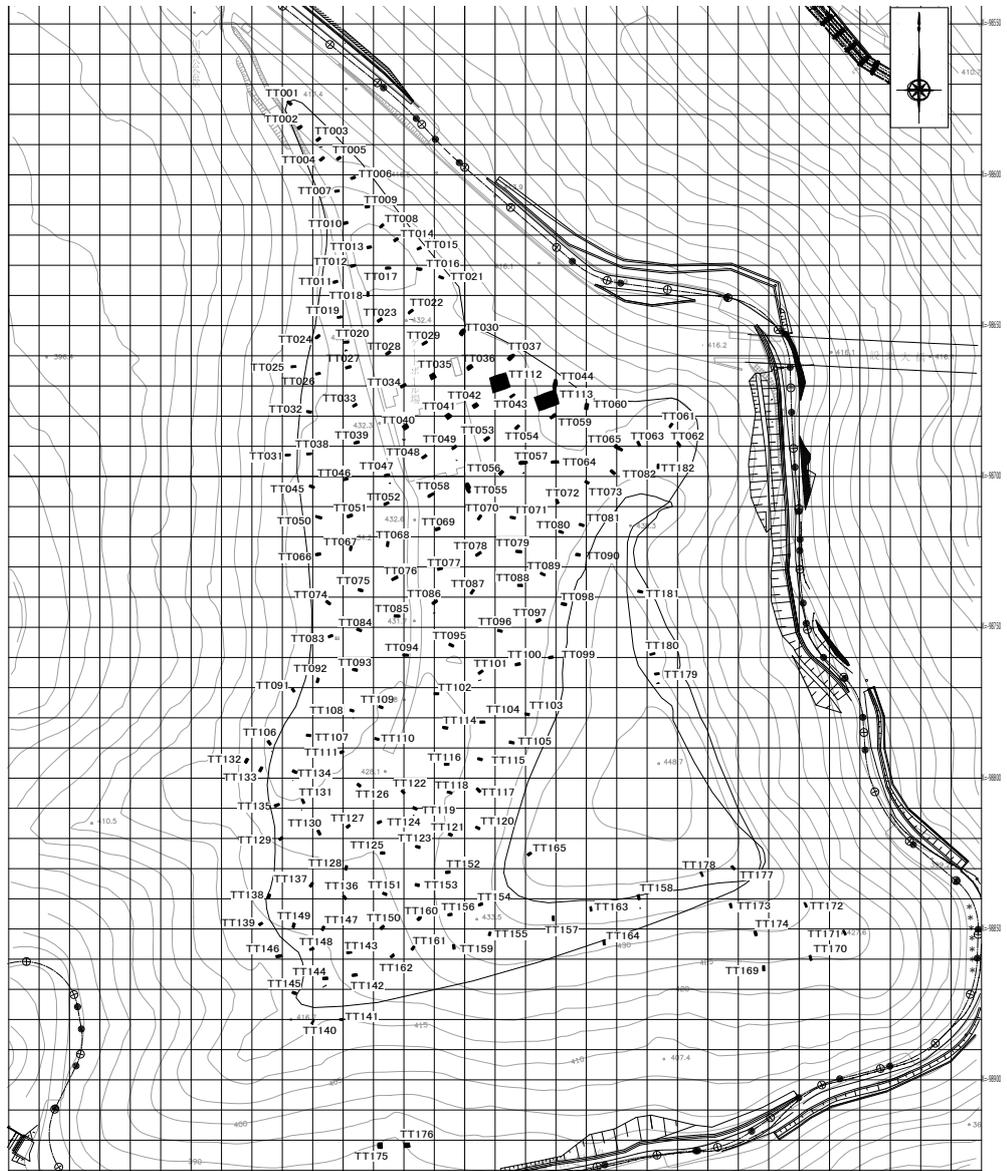


万瀬遺跡

範囲確認調査のトレンチ位置図 1 (1:2,500)

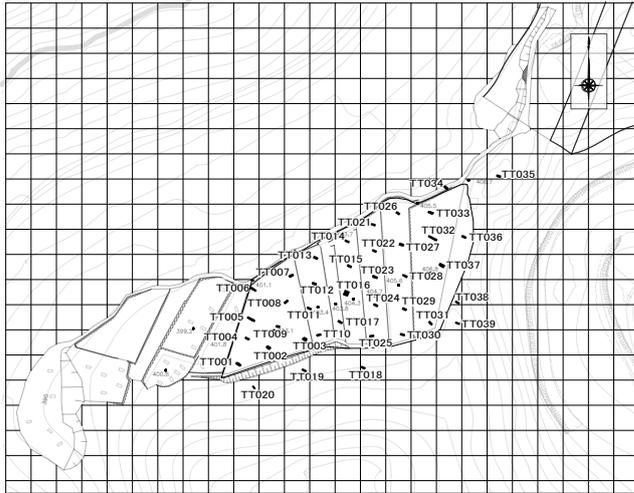


大栗遺跡

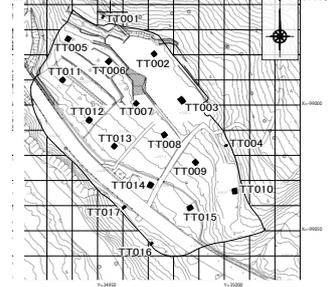


大畑遺跡

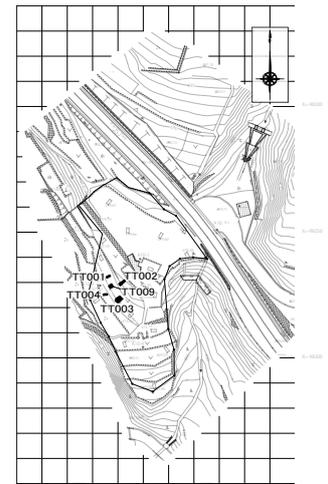
範囲確認調査のトレンチ位置図2 (1:2,500)



大名倉丸山遺跡



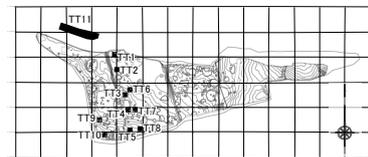
ハラビ平遺跡



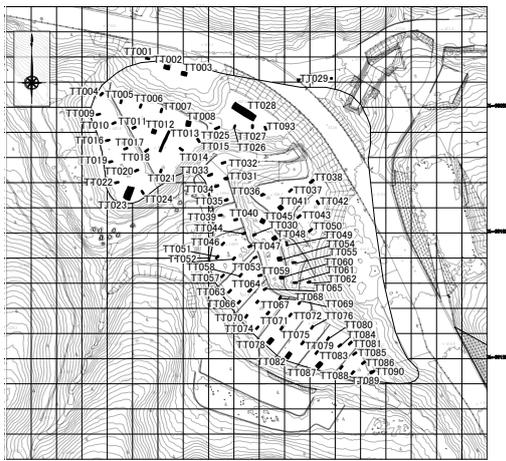
上戸神遺跡



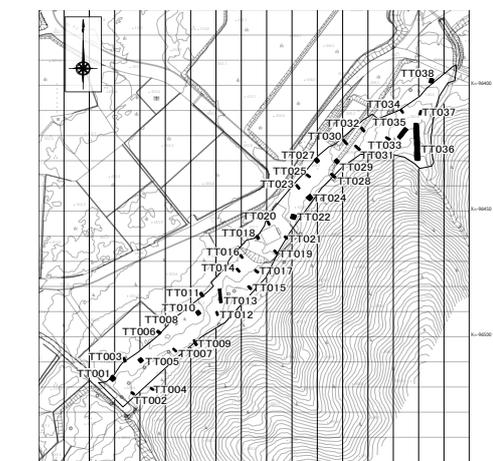
永江沢遺跡



川向東貝津遺跡



添沢遺跡



向橋遺跡

範囲確認調査のトレンチ位置図3 (1:3,000)

